

先週、私たちはエルサレム教会で起こった会議から共に学びました。ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者との対立。それは、主にヘブライ語を話すユダヤ人とギリシア語を公用語としていた異邦人という言葉の違いだけではなく、生活習慣や宗教的な背景の違いもありました。ユダヤ人社会は、昔から習慣化されていった旧約聖書の律法を特に重視する社会でした。さらに、ユダヤ人はほとんどすべての人たちがユダヤ教徒でしたから、旧約聖書の神、天地を造られ、イスラエルの人々をエジプトの奴隷から解放してくださった神様を信じていました。けれども、ユダヤ教の人たちにとっては、キリスト教は異端でした。イエスをキリスト、救い主として認めていませんでした。ですから、キリスト教に対する圧力はたいへんなものでした。ほとんどすべての人たちがキリスト教を認めていないどころか、キリスト教を敵視していたユダヤ人たち。私たち日本の社会もキリスト教はマイナーですが、その比ではありません。そんな状況のエルサレムの町の中に、ヤコブやペトロのいたエルサレム教会がありました。エルサレム教会の人たちは、自分たち自身がユダヤ教的な環境の中で育ってきたので昔から律法に慣れ親しんできたことありますが、律法になじみがあるということ以上に、教会の周りにいるユダヤ教の人たちを刺激しないような方法で、しかもユダヤ教の人たちにもキリスト教のことも理解して受け入れてもらうために、律法を重んじる教会となっていたのです。そのような状況の中で、エルサレム教会の中にはいつしか救いは「神の恵み」＋「モーセの慣習による割礼」によるのだという図式ができあがっていきました。人が救いにあずかるためには「神の恵み」だけに依るのではなく、「モーセの慣習による割礼」にも依らなければならない。ここで「モーセの慣習による割礼」というのは、単に割礼を受けることだけを意味するのではなく、律法を遵守することも含まれている言葉です。そしてこの割礼を受けることが、神様の約束、神の恵みにあずかる目に見えるしるしだったのです。このようにして、エルサレム教会は律法を重んじる教会となっていきました。

他方、ギリシア語を話すヘブライ人の教会には、いつしか、ギリシア語を話す外国の人々が少しずつ集まってくるようになっていきました。礼拝も、エルサレム教会よりは自由な雰囲気、自由な空気の中で行われていきました。やがて外国の人々の中にも、キリストを信じる人たちが出てきました。異邦人キリスト者たちはイエスを主と信じてバプテスマを受けましたが、彼らは生まれながらのユダヤ人ではありませんでしたから、当然、割礼は受けていませんでしたし、律法的な生活習慣も持っていませんでした。これまで自分たちが食事として食べてきたものを、キリスト者になったとたんに、これは食べたらだめ、あれも食べたらだめとか言われても困ってしまいます。私たち日本人が、律法で禁止されているうろこのない魚類、イカやタコが大好きなように、食生活の習慣は簡単に変えられないのです。ですから、異邦人の多いアンティオキア教会のようなところでは、それぞれの生活習慣によらない福音理解、生活習慣が違っていても、救いはただ神の恵みにのみ依るのである、ただ信仰によってのみ義とされるという信仰義認論を重んじる教会になっていくのでした。

そのような違う福音理解をしてきた2つの教会の間で起こってきた問題。それが先週の礼拝で学びましたエルサレム会議の背景です。先週学びましたように、エルサレム会議で

は、ペトロが「主イエスの恵みによって救われる」と言ったにもかかわらず、ヤコブはいくつかの付帯事項を付けました。そして、これを聞いたパウロは、自分の主張を押し通すのではなく、ヤコブの提案を受け入れるのです。ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者のそれぞれの思いがせめぎあう中、エルサレム教会のヤコブは、対立する双方が分裂することなく、お互いが少しずつ譲歩しながら歩み寄る方策を考えました。それが、両者が生き残っていくための方策であり、共に生きるということでした。自分たちの主張だけを強く押し通すのではなく、また相手の言い分だけを一方的に受け入れるのでもなく、両者がしっかりと協議して譲れるところは譲り、譲れないところはきちんと主張して、相手側の気持ちも理解しながら、双方が歩み寄っていく。こうしてエルサレム会議は終了しました。

こうしてエルサレム会議の結果を受けて、今日の聖書の箇所では、エルサレム教会から選ばれた人たちがパウロやバルナバと一緒にアンティオキア教会へ向かい、そこでエルサレム会議の決定を報告する出来事が記されています。そこには、最低限の条件として4つの付帯条件が付けられた以外は、いっさいの重荷を負わせないこと、すなわち、ユダヤ人と同じように割礼を受けることを強要しないことがうたわれています。4つの付帯条件とは、29節に記されているように、「偶像に献げられたもの、血、絞殺した動物の肉、みだらな行為を避けること」というこの4つです。

パウロとバルナバは、この条件付きのエルサレム教会の申し出を受け入れます。そして、パウロとバルナバを送り出したアンティオキア教会も、エルサレム教会の決定を受け入れます。今日の聖書の箇所、31節には、アンティオキア教会の人々が、励ましの満ちた決定を知って喜んだと記されています。この決定によって、それぞれの働きが妨げられることなく、教会の本来の目的である福音宣教の業に進んでいくことができたのです。

このようにエルサレム教会の決定を受け入れたアンティオキア教会でしたが、実はパウロ自身は、コリントの信徒への手紙一の8章に記されているように、偶像に備えられた肉に関しては、そもそも偶像の神など存在しないのだから、偶像に備えられた肉であろうとなかろうと天地の創造主である神様に感謝していただければよいという考えを持っていました。新訳聖書309ページになりますが、コリントの信徒への手紙一8章4節以下にはこんなふうに記されています。【そこで、偶像に備えられた肉を食べることについてですが、世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もないことをわたしたちは知っています。現に多くの神々、多くの主がいると思われているように、たとえ天や地に神々と呼ばれているものがいるとしても、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へと帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。】ここでパウロは、偶像なる神々は存在せず、唯一の天と地の創造主なる神がおられ、万物はすべてこの主によって造られたのだから、偶像に備えられた肉であろうとなかろうと、そんなことは関係なく、世界のすべてを造られた神様に感謝して肉をいただければよいのだと語るのです。ところが、パウロはその後にもっと優れたことを語ります。コリントの信徒への手紙一8章7節、【しかし、この知識がだれにでもあるわけではありません。ある人たちは、今までの偶像になじんできた習慣にとらわれて、肉を食べる際に、それが偶像に供えられた肉であることが念頭から去らず、良心が弱いために汚されるのです。わたしたちを神のもとに導くのは、食物ではありません。食べ

ないからといって、何かを失うわけではなく、食べたからといって、何かを得るわけではありません。ただ、あなたがたのこの自由な態度が、弱い人々を罪に誘うことにならないように、気をつけなさい。知識を持っているあなたが偶像の神殿で食事の席に着いているのを、だれかが見ると、その人は弱いのに、その良心が強められて、偶像に供えられたものを食べるようにならないだろうか。そうすると、あなたの知識によって、弱い人が減ってしまいます。その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです。このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるのは、キリストに対して罪を犯すことになるのです。それだから、食事のことがわたしの兄弟をつまずかせるくらいなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません。】このように、パウロ自身は、偶像の神々など存在せず、この世のすべてのもの天と地を造られた唯一の神によってこの世のすべての造られたのだから、偶像に供えられた肉であろうとなかろうと関係なく、天地創造の神様に感謝して食べればよいという信仰を持っていましたが、パウロが偶像に供えられた肉を食べることによって良心の弱い人をつまずかせるくらいなら、肉を決して食べないとパウロは語るのです。ここにパウロの素晴らしい自由な信仰のあり方が表されています。

パウロのこのような信仰に対する考え方をもとに、アンティオキア教会はエルサレム教会の4つの条件を受け入れました。アンティオキア教会には、救いはただ信仰のみ、恵みによってのみ救われるのだと信じているキリスト者がいました。彼らは異邦人伝道に非常に力を発揮しました。他方、旧約聖書の時代から脈々と受け継がれてきた昔からの伝統を重んじ守っていくことが神の道から離れないことなのだと考えて律法を重んじるキリスト者たちがいました。彼らはユダヤ教の人たちに対する伝道の重荷を持っていました。パウロ自身は、異邦人伝道者として顕著な働きを表した人でした。パウロ自身も、救いはただ信仰のみ、恵みによってのみ救われるという信仰義認論の立場を表した人でした。しかし、パウロは同時に同胞であるユダヤ人に対して、たいへんな重荷を感じていました。パウロの願いは、異邦人に神の救いが及び、やがてその神のあわれみによって、イエス・キリストを信じないユダヤ人たちも再びあわれみを受けることでした。

律法を重んじていたエルサレムのユダヤ人キリスト者にとって、律法全体の代わりにたった4つの戒めを守れというのはたいへん大きな譲歩でした。またその逆に、信仰のみ、恵みのみによって救われると信じていた異邦人キリスト者たちにとって、4つも戒めを与えられたということは大きな負担でした。しかし、お互いがそのようにして譲り合うことによって、互いに相手を切り捨てるのではなく、同じイエス・キリストを信じる者として歩んでいこうではないか。イエス・キリストの福音を宣べ伝える対象、伝道する相手はそれぞれ違うかもしれないけれども、ユダヤ人も異邦人もすべての人が救いに預かることを願いながら、それぞれがそれぞれのところで使命を受けて働いていく。その姿が、お互いの働きを励まし、勇気を与えてくれるのです。

この神戸西教会に集う私たち一人一人も、それぞれの状況や環境、信仰理解の仕方もさまざまです。しかし、そのような違いを越えて、お互いの必要のため、それぞれがおかれている環境で福音宣教の業が進んでいくために、立場や考え方の違いを越えて、共に働いていきたいのです。今年度、私たち神戸西教会は、伝道所の働きを終えたことを受けて、3本柱の一つとして、これまでの「伝道所を生み出せる教会」から「地域伝道・近隣伝道・

家族伝道」という柱を掲げて歩んでいます。けれども実際には、私たちの住んでいる地域の人々、自分の家の近隣の人々、そして何よりも私の家族に、私たちが信じているイエス・キリストが伝わっていない。いちばん身近な家族や友人に、何とかこの素晴らしい救いを伝えたいと願っているのに、言葉が届いていかない。そんな現実があります。そんな思いを持っておられる方は、どうぞ一人で悩んでおられないで、祈祷会にきて、あなたの家族のために、自分の家族のために、一緒に祈ろうではありませんか。2つの教会がお互いのために譲り合い受け入れ合ったのは、2つの教会がそれぞれのところで共に働くことによって、一人でも多くの人が救いにあずかるためでした。私たちの願いも、まさにそこにあるのです。私たちがすでにあずかっている救いの道。これを何とか一人でも多くの人に伝えたい。できれば、身近な人たち、地域に住む人たち、近隣の人々、何よりも家族にいちばん伝えたい。そう願いながらも、なかなかうまくいかない。そう感じている人は、一人で祈るだけではなく、同じ信仰を持つ教会の兄弟姉妹と共に祈りを合わせ、何とか福音宣教の業が押し進められるように祈ろうではありませんか。このような祈りによって、アンティオキア教会とエルサレム教会は、互いに譲り合い励まし合って、それぞれのところでそれぞれの人々に対して福音宣教の業に励んでいったのです。

お祈りしましょう。